

Title	近代日支鮮関係の研究(田保橋潔著, 京城帝國大學印行)
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.1 (1931. 3) ,p.147- 148
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310300-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

デュルケム 宗教生活の原初形態 (古野清人譯) (刀江書院發行)

デュルケムの *Les formes élémentaires de la vie religieuse, le système totémique en Australie* が宗教學の名著として今日殆どラシツクの觀あるのは何人も異論なき所であらう。かのデュルケムと立場をここにせるアメリカの民族學者たさへばロウキイの如きも本書を以てもし「辯證的天才のみをもつて實驗科學の分野に於て大業績を成就なし得るませば本書はその目標たるべきもの」と稱讚してをる。デュルケム去つて後もその朋友弟子達の努力により彼の思想はますますその價値を認識され、その方法は益々擴大して利用されつゝあり、所謂「社會學派」は、今日フランス學界において鬱然たる一大勢力を形成しつゝある。デュルケムの著作中その「社會的方法論」は數年前田邊壽利氏により邦譯されたが、此度同氏の最大傑作たる本書が畏友古野清人氏により邦譯され、上巻が發兌せられしことは近來の一快事である。譯者は東大宗教學科出身の新進氣鋭の學徒、難解をもつて音に聞ゆるデュルケムの文章が、少しも滯滞する所なく明快暢達なる邦文に移植されたことは我學界のため欣喜に堪へざる所である。一體明治年代の我國未開宗教研究は英米學者の影響を受け、アニミズム、ナチュリズム一天張りにて今日に於てなほその痕跡が消えきらぬ。知名なる學者にして今日もなほ日本神道の解釋に對し、アストン、チェンパーレンの亞流に過ぎざるもの多きを見受けるのは遺憾である。本書の初頭におけるアニミズム、ナチュリズムに對する批判宗教の基本的性質として聖と凡俗との對立の指摘の如き我國民族學關

係學徒の是非とも常識としてわきまふべき卓説である。よしデュルケムの社會至上説に異論ありとしても次に來るべき者は必ずやデュルケム學説の洗禮を受け、之を経過したものであらう。此偉大なる大著を我學界に提供された古野君の勞苦に深く感謝しひろく江湖に一讀を推薦する。(松本信廣)

近代日支鮮關係の研究

(田保橋潔著) (京城帝國大學印行)

本書は京城帝國大學教授田保橋潔氏が京城大學より公にされたもので、その主眼とするところは、日支兩國の官公文書によつて、明治十八年天津條約より明治二十七年日支開戦に至る日支鮮關係を考察された點にある。而して本書の一特色ともいふべきものは、文中多くの日支兩國の公文書が引用されてゐる點である。

次に本書の目次を擧ぐることにする。

第一章、天津條約後の日鮮關係 一、天津條約論 二、金朴事件(上) 三、金朴事件(下) 第二章、東學黨變亂及日支の干渉 一、東學道の沿革、東學黨變亂、三、支那の干渉、四、日本の出兵第三章、朝鮮を中心としたる日支交渉、第四章、朝鮮國內政改革問題 一、日支共同改革の失敗、二、日本の單獨改革要求、三、內政改革と日支勢力の消長、第五章、朝鮮國政府改造、一、日鮮交渉の停頓、二、大院君の第三次執政、第六章、列強の干渉、一、ロシアの干渉、二、英米の干渉、第七章、日支開戦等の項目に亘り、盛んに健筆をふるはれてゐる。之を要するに本篇は一の未定稿と著者は云はるゝも、近代日支

關係につき、權威ある論文の公表さるゝこと殆どなき今日、本書は此の方面に於ける唯一の好著と云はなければならぬ。われらは著者の史料蒐集に對する努力と文中隨所に感知し得る犀利なる觀察とに對し深甚なる敬意を表するものである。終りに、本書の續篇たるべき明治時代に於ける日鮮關係の進展（壬午及甲申政變の研究）並びに下關講和及び三國干涉の研究の一日も早く公表されることを切望し擲筆する。（宮島貞亮）

國 史 概 論

（重原慶信著）
（白林社發行）

本書は著者が、國史を貫く歴史的精神を把握せむことを主眼として、口述筆記せしめたものと云ひ、序論本論の二に大別してある。

先づ序論「我等が國の將來」に於て、「一國の將來を卜するにはその國の過去即ち歴史より立論すべきであるが、我が國史より見て、日本の將來にかけての隆盛發展は必然の事と云はねばならないのであります。領土・國民・主權・文化等は國の將來を卜すべき重要要素と云はれますが、我が國の歴史にて此等の點を考へますに何れも優美にして生氣あり従つて將來は充分に愈々發展する國家なりと思はれるのであります。：：我等の國體觀念は、嵐吹くも雨降るも、更らに渝らないのであります。されば隣邦支那の如くに革命革命の有り得べき筈も無く、國民は永久に國內的には平和であり得るのであります。又我が文化は和魂漢才の精神にて、常に他國文化の長所を取り入れ、消化して、常に活潑性を有し沈滞

することなく、向上の性を有して居り、領土、人口亦向上發展の光明に輝いて居るのであります。』と、卷頭に於て我が國運進展を卜して居る。

次に本論に於ける説述は、從來の諸説と大差なきも、讀者に教示を與へたもの、一二を掲げるさかの南北朝問題に就いて「歴史上の事實としては確かに南北兩朝存在し、又その名前もその頃より用ひられたものであります。故にこの時代史を説くに當りましては歴史は事實を説明するものであるこの假定の下に立つならばいつくまでも南北朝分立といふべきものでありませう。又歴史は國民教育の材料なりこの假定に立つならば、現制度の如くに説くべきものでありませう。故にいづれの説も立場を異にすれば眞實ではあります。二つの立場を混同して徒に議論するは非なりと私は信じます。』又足利時代の特徵たる下剋上の流行に關して「かく下剋上が流行したのは尊氏が、その手本を示したためだけに原因するかと申しますと、實は然らずして社會組織の要素たる家族制度の破れたことに基くところが多いのであります。：：下剋上の言葉は文字の正面より解釋するならば、下として上を討つことは褒むべきことではないが、側面より眺めたならば、實力ある下の者が實力なき上に代るの意味で即ち新陳代謝の義であり、新勢力の發展を意味し、一口に善からざることをして却くべきことではありますまい。要するに實力の競争と云ふこの時代を経て活潑なる日本近世史は生れ出たものであります。』と論述して居る。序で乍ら幕末に於ける通商條約調印の奏請に關して「今、通商條約を調印せむとするに當り幕府諸大名より賛成を求むることが出来